

防災力
UP!の
ためにも

蟹江町と名古屋市では明らかに違う 災害時の復旧力と備え

平成12年、この地域は東海豪雨に襲われました。

その日のことを、まだはっきりと記憶している方も多いと思います。

新川の堤防が約100mの幅で決壊し、洪水となって名古屋市西部や、当時の新川町、西枇杷島町周辺に流れ込み、広範囲に深刻な浸水被害がありました。

市内では4人が犠牲となり百棟以上の家屋が全半壊、1万棟近くが床上浸水しました。

名古屋市は、この被害を教訓とし、豪雨の翌年から、内水対策として、一時間当たりの雨量の想定を、従来の50ミリから60ミリに引き上げ、激しい雨の時でも、床上浸水を防ぐために、土地の低い地域を中心として、市内32カ所に直径3～4mの雨水貯留管を地下に埋め込みました。これからも各所に、管の新設やポンプの排水能力を上げる工事を進めていきます。総事業費は、二千億円になるということです。蟹江町では、このような早い対応は難しく真似ができません。もちろん、名古屋市と蟹江町では、財力と規模の違いがあるわけですが、この財力と規模の違いこそ、災害時の復旧、支援の差となってしまいます。南海トラフ地震が心配される今、私たちはより安心な名古屋市との合併を目指します。

支援物資が遅れ復旧を待つ
当時の西枇杷島町民
(平成12年東海豪雨)

↓ (中日新聞)



名古屋市の貯留管内部(現在工事中のもの)



東海豪雨で決壊した新川



水没するバス(国土交通省)